

すべてが繋がっている、 つながっていく時代 セキュリティ&セーフティを強靱にすること、 人を育てることが大切!

今号の特集は弁護士の岡村久道先生と
当社代表取締役社長材木正己との対談です。
岡村先生は情報学の博士号をもち、内閣サイバーセキュリティセンターや
総務省、経済産業省、厚生労働省などの様々な部会の
委員や座長を務められています。岡村先生に知的財産をどう守るか、
情報セキュリティをどうするかといったことなど、
また日東精工を外から見てどう評価できるかなどをうかがいました。



岡村久道先生 (左) と材木正己

材木正己 当社代表取締役社長 (以下材木) : 岡村先生には25年、四半世紀にわたって当社をみていただいています。先生は企業だけでなく、各官庁のいろいろなプロジェクトの委員も務められておられますね。

岡村久道弁護士 (以下 岡村) : 厚生労働省発行の「冊子」をご参考までにお渡します。「労働安全衛生法」という法律があります。昔は危険な職種などの安全対策をどうするかがメインでしたが、今は長時間労働やセクハラ、パワハラ、そしてそれにつながるメンタルヘルスの問題、うつ病……男性と女性で受け止め方や対応の仕方も違いますから、こういった従業員情報にどう対処していけばいいのか、各界の専門家が集まって知恵をふり絞ってこの冊子をまとめました。私も法律的な観点から発言させていただいております。

材木 : ありがとうございます。ぜひ、勉強させていただきます。私どもも健康経営宣言をしたり、この4月からはダイバーシティ推進室を設けたり

していますが、これは車を運転していくための免許証だと思っています。いくら業績を上げていても、こういうところがしっかりしていないと、やはり城は崩れていくと思っています。ただ、パワハラにしてもセクハラにしても、厄介なのは同じようなことが問題になるときもあれば、ならないこともある……。

岡村 : 上司に言いにくいから自分で抱え込んでいたりとか、伝える相手によって対応が違ってくという問題があるわけです。やはり第三者、客観性が必要になります。御社では「内部通報窓口」を設けられ、私どもがその窓口になっています。内部通報というと「タレコミは裏切り者」というイメージを抱く人がいますが、それはまったくの誤解です。ときには勘違いのクレイマーもおりますが、会社を良くする、会社を救うために不可欠な安全弁ですね。

会社は変わらなくとも、 若い人の意識が変わってきている

材木：お客様にとっても、会社にとっても、そして従業員をはじめ世間全般にとっても満足できるもの、つまり「三方良し」の関係が理想だと思っています。しかし、これは会社が健全な財務体質でなければ、その実現は難しい。働き方改革、労働時間短縮といっても、生産性が減っていけば企業力は落ちてしまい、国際競争に負けてしまいます。

岡村：なかなか難しい問題です。ただ欧米などに比べ日本企業の時間当たりの生産性が必ずしも優れていないのは客観的事実です。たとえば〈今日の担当業務は完了したが、自分だけ先に帰るのは申し訳ないから残業しよう〉といった“ゆがみ”は修正していかなければならない時代でしょう。それから定年が65歳、いずれ70歳まで延長が予測されます。もちろん、健康で長生きなのがベストですが、病気になることもあるわけです。大病したらリタイア、隔絶されるのでなく、治療と仕事が両立できる体制づくりもこれからのテーマです。

材木：女性についてもいろいろな働き方があるのも良くて、キャリア志向の女性がいる一方で、結

婚、出産、育児を大事に考える女性がいてもいい。わが社では今年からジョブリターン制度も設けています。いずれにしても、企業の稼ぎ力を落とさないこと、短時間労働と生産性をどう結び付けていくかが課題ですね。

岡村：欧米などではトップエリートといわれる人ほどモーレツに働いています。日本でも専門職には労働時間の制限をもうけていません。〈時短〉だけを取り上げるのではなく、いろいろな選択肢があること、バランスが大事ということでしょう。また、若い人の意識がどんどん変わってきているので、それをしっかり把握することも大事ですね。

材木：おっしゃる通りですね。自分が若いころは貧乏でハングリーで、がんばってカメラを買おう、次は車、家を買おうとガムシャラが当たり前でした。でも今は豊かになって最初からブランド品もっていてガツガツしていない。会社で無理に偉くなくてもいい、役職につかなくてもいいという人も増えています。

岡村：昔、〈自分探し〉なんて言葉が流行りましたが、〈自分の夢を実現させたい〉という希望もっている若い人は今も多いようです。この夢の実現と会社をどうリンクさせられるかですね。私



岡村 久道 (おかむら ひさみち)

弁護士法人 英知法律事務所所属弁護士、博士（情報学）。京都大学大学院（医学研究科）非常勤講師。JPCERT/CC理事。フィッシング対策協議会会長。

総務省「情報開示分科会」座長を務めるほか、これまで経済産業省「産業サイバーセキュリティ研究会」、内閣サイバーセキュリティセンター「サイバーセキュリティ戦略本部 普及啓発・人材育成専門調査会」、厚生労働省「健康情報の取扱いに関する検討会」など数多くのプロジェクトに係る。著書は『個人情報保護法』『情報セキュリティの法律』（いずれも株式会社商事法務）ほか20冊を超える。平成21年度情報化促進貢献個人の経済産業大臣賞・平成25年度情報通信月間総務大臣表彰（個人）

どもの事務所でも、若い弁護士にその人の得意分野を見つけて任せると生き生きと仕事をこなしてくれます。ある程度責任を与えて任せることが大事ですね。もちろん、お客様に損失を与えない、迷惑をかけないというのが大前提で、しっかり骨を拾ってあげる（フォローする）ことが必要です。

材木：私は常々「もっと要領よくなれ」と言っています。要領よくといってもこずるいことをしろということではありません。失敗はしてもいい。しかしそれを糧にしろ、失敗を繰り返すなということです。

岡村：〈失敗は発明の母〉という言葉がありますが、ご指摘のように自分の失敗から何を学んで今後に最大限活かすかという前向きな姿勢が大切です。

綾部に本社をおいているのは じつは最先端なこと?!

材木：それで先生にお尋ねしたいのですが、弁護士というお立場から、外からご覧になったとき、当社はどんなふうに見えるのでしょうか。

岡村：日東精工さんとは25年以上のお付き合いになり、ここでは言えないいろいろなご苦勞も見てきました。それから、じつは私の母の実家が御社の本社がある綾部というご縁もあります。また趣味が鉄道写真で今度、自費出版でSLの写真集を出そうかとも思っているのですが、昔は綾部あたりまでよく写真を撮りに行ったりして、御社の前を通ることもありました。だから〈身内〉という感覚がありますので、客観的な評価とは違うかもしれません。でも温かな雰囲気である、大きくグローバルであると同時にアットホームさが共存している会社であることは確かですね。

材木：ありがとうございます。私は常々、成長戦略、いやさか 弥栄経営と話しています。会社が伸びていけば従業員もうれしい。今日よりも明日、明日よりもさらにその翌日、少しずつでいいけれど会社が良くなっていく、お客様も従業員も皆が幸せになっていくというのを願っているのです。それには

皆のベクトルが同じ方向に向いていないといけません。先生から、アットホームだと評価をいただいて、ほんとうにうれしいですね。

岡村：どこのどの会社ということではなく、大都市圏に勤める若い人たちを見ていると残念に感じることがありますね。言葉や態度はとてもスマートだけれど、窮屈そうでのびのびできないというか、周囲の目を気にして縛られているというように見えます。

材木：情報をしっかりとる、お客様のニーズに応じていくために、当社でも広報マーケティング部門などは東京においています。私は月の3分の1ぐらい国内外あっちこっち飛び回っており、出張で東南アジアの各国を回ることも多いのですが、日本に比べて裕福ではないけれど、皆明るくて幸せそうな顔をしているように思います。でも帰国して、日本の空港に降り立つと、確かに皆が気難しい顔をしていますね。あまり愉快そうでないのか……。それでも地元に戻ってくるとホッとしますし、わが家は会社からさらに車で30分ほどの郊外にあるので、休みの日に庭の手入れをしていると、あれこれ余分なことを考えることなくリフレッシュできます。



岡村：本社を綾部においておられるというのも、じつは案外、時代の最先端を行っておられるのかもしれませんが。たとえば空母を例にとるとわかりやすいはずです。安心して戻るところがあるから外で戦えるわけでして、帰れるところがあるというのは強みですね。

軽率行動は会社だけでなく、 自分自身をダメにする

材木：温かい、アットホームという評価をいただきましたが、ざっくばらんにお聞きしたいのですが、当社は100点満点とすると何点ぐらいの評価でしょう？

岡村：80点でしょうか？ 他社と比べてこれがいまい悪いでなく、また80点が100点から20点マイナスということではなくて、今後まだまだいろいろな取り組むべき課題が次々登場する時代環境にあるということです。私は総務省や経済産業省などの座長を務めているのですけれど、セキュリティ&セーフティの問題もそのひとつ。工場が不正アクセスされて製造ラインが止まったりしたら大変ですし、自社、中だけの問題でなく、特に産機事業部などの事業や製品に対してはこういう面での

対策やフォローがますます求められるでしょう。トランプ大統領が特定の外国企業の製品の締め出しをしましたが、どこにバックドア*が仕掛けられているかわからない。IoTで全部がつながっている、つながっていく時代ですから、セキュリティなどがより強靱で信頼性の高い製品の供給が求められます。

材木：SNSで起こっている問題などはどうとらえたらいいのしょう。

岡村：これは「教育」が最優先です。居酒屋で酔っ払って同僚に文句を言うとか、家で奥さんに愚痴をいうレベルまではいい。でも、たとえば銀座や御堂筋で拡声器を使って人の悪口は言わないでしょう、恥しいことはしないでしょうと。SNSで発信するということは、そういうリスクを伴っているということを周知徹底させていくしかありません。

材木：軽い気持ちでやったことが取返しのつかないことになる……。

岡村：場合によれば名誉毀損で逮捕され、損害賠償請求される、会社を懲戒解雇になる、自分の顔も名前もさらされるので次の就職もうまくいかず、家族も肩身が狭い思いをする。結局、人生を棒に



※サイバー攻撃のひとつ。一度攻撃され侵入された後、攻撃者が入りやすい入り口を設置されること

ふってしまうことになります。会社にとってマイナスだけでなく、自分が重い責任を追及され家族も不幸になることをしっかり学んでもらうということです。一部の悪ふざげや炎上が話題になりますが、御社にとっても他人事ではありません。

材木：かつてはお年寄りのパソコン教室が人気だったのが、最近ではスマホ教室が盛況だそうです。認知症の方が万が一はぐれても位置情報でどこにいるかすぐにわかるとか、小さな端末にいろいろな情報を納めることができるとか、便利は便利だけれど、一方で怖いモノという意識があまりない。

岡村：情報を漏らそうという悪意がなくても、メモがわりに撮影していたものが漏洩するとか、この程度ならいいだろうとSNSに上げた情報がその他の情報の組み合わせで全体像がわかってしまう。しっかりとしたルール決めも大事です。先ほども申し上げたような、セキュリティ&セーフティにつながっていくのです。

材木：先生の事務所に研修をお願いしているそうですね。ぜひ、教育してください。

オープンにすべきことと しっかり守るべきもの

材木：セキュリティの話がでしたが、特許や知的財産についてもお聞きします。私は技術が大事、特許を取ることが大切だと思っています。当社が今まで以上にグローバル化を進めていくなかで、こういったものをどう守っていくかも課題だと思っています。こちらが善意で技術を教えていても、相手が善人ばかりとは限らない。2次流出ということもあるわけですし、海外の山奥でこっそり使われていればそこまで追求していくことも難しい。

岡村：これからは知的財産を守る方向へ転換していくでしょう。ただ、実際は複雑です。特許としてしっかり守る、公開して「国際標準化」を目指すというオープン戦略と、それを実際に最大限活用するための技術ノウハウなどを営業秘密としてクローズドにして守るという区分を、自社の特質

を踏まえて、しっかりと使い分ける必要があります。オープンクローズド戦略と呼ばれています。たとえばトヨタは水素自動車、そして次にハイブリッドカーの基本情報はオープンにしています。これは自分たちの技術を急いで国際標準化することを目的とすると同時に、たとえ基本技術をオープンにしても、パラメーター設定など細かい技術ノウハウの面では決して負けないという自信の表れでもあるわけです。

材木：私どもでは国内中心からグローバル化を進めています。今は海外の比率は27%ですがこの数字はこれからもっと大きくなります。単にいい製品・技術を提供するというのではなく、それぞれの国ごとに常識が違うということをしっかり認識していきたいと考えています。

岡村：これまで韓国が上手で、それを中国も追っているのがデファクトスタンダード（国際機関が定めるものではないが、事実上の標準化）とローカライゼーション（現地化）です。この部分が最近の日本が弱いところです。それぞれの国にあったニーズを掘り起こしそれに応えることも大事ですね。また、変化に気づく、変化についていくと



いうのも大事ですが、変化のさらにその1枚も2枚も上をいくぐらいでないといは勝ち抜いていけない……。かつて優れたゼロ戦を開発したのに、それがことごとく撃墜されたのは戦術が変わったことへの対応ができなかったからだといわれています。ある公立学校の先生から、できの悪いのも困るけれど、できの良すぎるのも枠からはみ出て集合教育の場では困るというような話を聞いて、何たることかと失望しました。教育者がこじんまりとした枠組みをつくっていてどうするんだと……。

材木：AIとかIoTのことが盛んにいわれています。もちろんこれらは素晴らしいものであるには違いないけれど、個々の積み重ね、ビッグデータの中から生み出されるベストであって新しいものではありません。やはり最後は人、真のイノベーションや新しい技術は人が生み出すものだと思う

ています。日本には優秀な人は多いけれど、ずば抜けて、というのが少なくなったように思います。

岡村：技術開発という点では、たとえば〈精密ねじ、極小ねじではナンバーワンでどこにも負けない〉というようなフラッグを立てることができ、皆が同じベクトルに向かっているということが、御社の強みですし、右肩上がりの成長を維持している証でしょう。

材木：驕らず謙虚に、人づくり、モノづくりに励んでまいります。経営の透明化やコンプライアンスはこれからますます重要ですし、知らなかったからでは済まされない、それが命取りになることも多いです。先生にはこれからも厳しくご指導いただければと願います。今日は本当にありがとうございました。

NITTO's TOPICS

超小物部品専用検査選別装置 ミストル(MISTOL®)Fタイプを新発売

大量の部品を生産する製造工程では、品質を維持する検査工程は欠かせません。とくに極小部品の検査では、ワークの安定した搬送が難しく検査にも多くの時間が必要になります。当社制御システム事業部の小物部品検査選別装置「ミストル(MISTOL®)」は2006年の発売以来、小物部品の検査精度や高速性が求められる自動車業界を中心に高い評価を得ていますが、この度、極小ねじなどの超小物部品専用検査選別装置「ミストル(MISTOL®)Fタイプ」を開発し、新たなラインナップとして販売を開始しました。「ミストル(MISTOL®)Fタイプ」は、極小検査工程の救世主として、お客様のモノづくりをサポートしてまいります。



「第3回[関西]接着・接合 EXPO」に出展致しました

5月22日から24日までインテックス大阪で「第3回[関西]接着・接合 EXPO」が開催され当社日東精工も出展しました。既にご案内通り、



当社ファスナー事業部の「AKROSE (アクローズ)」は、「冷間圧造技術」を用いて素材を成形した後、その素材同士(複数個)をプレス加工によって強固に接合させる、まったく新しい「異種金属接合」技術です。従来の工法で必要だった接着剤などの媒体素材、温度や音波、レーザーなどの印加が不要で、環境負荷の低減に貢献するもので、今回、関西地区での一般初披露となりました。また樹脂材への軽量化支援ねじ「カラーレスタイト」や精密プレス品(関連子会社株式会社伸和精工製品)も同時展示しました。

NPS社が「広州支店」を開設 中国南部エリアでの拡販を強化します

中華人民共和国における当社連結子会社・日東精密螺絲工業（浙江）有限公司（以下「NPS社」）は、6月1日、広州市に支店を開設いたしました。NPS社は2001年に設立。家電、IT・情報機器を中心に工業用ファスナー（ねじ）の製造販売のみならず、2009年からはねじ締め機などの産機事業部製品も販売を開始し、自動車業界を中心にお客様から好評をいただいています。

多くのお客様が拠点を置く華南地区において、今後更にお客様との接点を強化し、高品質化のニーズにお応えすべく、広州市に支店を開設することとしたもの



で、当支店の開設により、迅速なサービス体制とモノづくり提案によるお客様満足度の向上と受注の拡大を実現してまいります。日東精工グループにおける成長戦略の一環として、中国市場での事業拡大を視野に入れたものであり、これにより当社グループのグローバル展開をさらに拡大させてまいります。

マレーシアの現地法人MPM社が 創立25周年を迎えました

当社のマレーシアの連結子会社MALAYSIAN PRECISION MANUFACTURING SDN.BHD. (MPM社)は、この度創立25周年を迎えることができました。MPM社は2～5mmの座金組み込みねじをはじめ小ねじ、タップタイトねじなど工業用ファスナーを中心に月産1億本の生産能力を誇ります。輸入販売では締結部材を中心にテープ類やダイキャスト品等、幅広い商品を取り扱っています。今後同社では、QCDを含めたお客様対応力を一層高め、自動車業界へのシフトに注力するとともに、自動組立機械や自動検査装置などの取扱いも拡大し、より一層の事業拡大を図ってまいります。



式典には同社役員・幹部・従業員のほか日本からも日東精工の材木正巳代表取締役社長や役員陣が出席。25年の節目を喜びました

グループ子会社で経営理念研修 ベクトルを合わせシナジーを追求

日東精工では創立25周年(1962年)に、一般には社是と呼ばれる、経営理念「我らの信条」を制定し、また2005年にはこの「我らの信条」と「行動規範」を解説した小冊子『我らの道』を発行しています。すでにニュースレター等でご紹介しているように日東精工グループは成長路線に基づき拡大をしています。協栄製作所や伸和精工など新しく連結対象となった子会社も歴史をもちそれぞれに誇るべき理念や行動規範をもっていますが、日東精工グループとしての理念・価値観を共有すべく、本年5月から日東精工グループ会社社員を対象にした『我らの道』研修を行うことにしました。グループ社員が一丸となることで、これまでになかった新しいものが生まれていくことを期待しています。



小冊子『我らの道』。下は協栄製作所(奈良)での研修の様子



「尽きた」といえるまで策を尽くしたか？

6

月の花嫁」「ジューンブライド」という言葉

があります。ジメジメ蒸し暑い梅雨に挙式を考えると人は多くありません。それでも結婚式場をうまく稼働させたいという思いから、結婚業界がひねり出したアイデアです。欧州では「結婚の女神Juno」が6月を守護している」という言い伝えもありますが、それを引つ張り出して大々的にPR。逆境を跳ね返すために昔からあの手この手と努力をしてきたわけです。もっとも最近では「ジミ婚」流行りで、6月だけでなく年間を通して苦戦を強いられると聞きます。それでも「ドローンを使う記念撮影」や「新郎の母親にもスポットライトが当たる演出」など「いい知恵」「ユニークな策」が次々生まれています。

ところで「万策尽きた」という言葉がありますが…。

「万策尽きました」などという。「そうか、ほんまに

〈万〉もやったかと聞くと、なんのことはない、三つ四つやってみたにすぎぬ。「それやったら三策尽きたやないかまあ、せめて、その3倍の10くらい考えてみてくれ」

これはある同族会社オーナーが父親から伝えられた「自戒の言葉集」のひとつです。ほかにもいくつかご紹介すると「**企業とは危業である**」(売れる保証のないものに先行投資をしているのがメーカ。いわば「無契約生産」なのだ。企業は「危業」であり、売れる保証のないものを売っていくには「命がけ」しかない)。「**紙一重の差**」(どんな企業にも、どんな人にもつまずきはある。つまずきこけて、立ち上がるのと、立ち上がらないとの差は紙一重である。そして、行き詰まりのときに、自分の気持ちを明るくものに180度転換できるかどうか、その紙一重ということではなからうか)。

「努力とは、苦勞・勤勉・持

続である」(努力とは、苦勞・勤勉・持続の三つからなる。そのどれが抜けても努力していることにはならない。果たして、苦勞、勤勉、持続からなる努力をしているかどうか、常に反省すべきだ)。「**アセリ峠**」(焦るということはそれだけ努力をしていること。チャランポランな人間はおそらく本当の意味での焦りを知るまい。人生には努力しても報われないことがある。必ず報われると思うから焦り

が出る。報われないことがあると知りつつ、なお続ける努力こそが本物なのだ。ここにしか「アセリ峠」を踏破するコツはないように思える)。「**人間、気迫である**」(絶えずドアの取っ手を握り、ドアの向こうの道の世界へいく気迫が大事である。また物事に対する気迫、勢い、それが説得の要諦である)。

強い、激しい言葉でありますが、企業人たるものこうありたいと自戒します。

連載18

あやべ ちょっと寄り道

やさしい気持ちになれる
サクラティエ

日東精工が本社をおく綾部には特徴のあるカフェがたくさんあります。障がい者を中心に運営されている絵本カフェが「サクラティエ」。敷地内の公園には立派な桜があり、ガラス張りの店内からは花の季節はもちろんのこと、新緑、桜紅葉と、四季折々の表情が楽しめます。丁寧につくられるスイーツはおいしく、お土産にできるものも充実。ゆったりとしたやさしい時間が流れています。観光スポットグンゼスクエア「綾部バラ園」「あやべ特産館」から徒歩圏なのでぜひ足を運びください。

